

【学会報告】**シンポジウム「世界各地の小児研究：拠点における継続的な取り組み」
ベトナム・ニャチャンにおける小児感染症研究****樋泉 道子¹⁾**

1) 長崎大学熱帯医学研究所小児感染症学分野

【はじめに】

長崎大学ベトナムプロジェクト拠点ニャチャン分室では、2007年よりベトナム中南部ニャチャン市において、国立衛生疫学研究所、カンホア保健局、カンホア総合病院、ニャチャンパスツール研究所らと協働し、小児感染症の予防と制御に資する疫学研究を継続してきた。本報告では、その主な取り組みと近年の成果、今後の展望を述べる。

【母子感染症】

2009～2010年に約2000組の母児を登録した出生コホートにより、B型肝炎や風疹などの母子感染症と児の発達への影響を調査した。2011年の風疹全国的流行後には、先天性風疹症候群児を継続的に評価し、心疾患、視聴覚障害、発達の遅れを明らかにした。2017～2018年には新たな出生コホートを立ち上げ、ワクチン導入後の風疹感受性率評価に加え、先天性ジカウイルス感染症の有病率調査および感染児の追跡評価を行った。

【Vaccine preventable diseases (VPDs)】

百日咳、ジフテリア、麻疹、B型肝炎などを対象に、出生コホートや地域・学童を対象とした血清疫学調査を通じて、抗体保有率、保菌状況、発生リスクを評価してきた。肺炎球菌については、接種回数を減らした肺炎球菌結合型ワクチン接種スケジュールが標準スケジュールに劣らない保菌抑制効果を有することを示すクラスターランダム化試験や、乳児への伝播経路推定など、ワクチン政策に資する研究を実施した。

【急性呼吸器感染症】

2007年からカンホア総合病院小児科において、呼吸器症状で入院した小児を対象とした急性呼吸器感染症サーベイランスを継続している。臨床疫学情報に加え、鼻咽頭・血液検体を系統的に収集し、RSウイルス、インフルエンザウイルス、ヒトメタニューモウイルス、エンテロウイルス、肺炎球菌などを同定するとともに、ゲノム情報を用いた解析により病原体疫学の長期的変化を明らかにしてきた。

【結果】

今後は、これまでに構築した調査・検査体制を基盤として、主要病原体およびVPDsの継続的サーベイランスを推進するとともに、他研究機関との連携や人材育成を通じて、小児感染症に対する効果的な予防・治療介入の提案と国際的発信を目指す。

キーワード：ベトナム、母子感染症、Vaccine Preventable Diseases (VPDs)、急性呼吸器感染症、小児